―光を継ぐ者―

型月型

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―光を継ぐ者―

【Ｎコード】
Ｎ５２００Ｍ

【作者名】
型月型

【あらすじ】
神々と共に生きる世界、ノルディーシャ。
この世界に存在する大国エストニアは第二級神、光を齎す神子ヒュミエルの名の下繁栄を続けてきた。
だがしかし、血族の途絶えた王家は新たな王を王位に据える。それが崩壊の始まりだった。
滅びの道をひた走るこの国に光の龍を宿した王が今、舞い戻る。

嵐の夜（前書き）

異世界物の小説です。
まだまだ至らないところもあるかと思いますが、気になった部分はなんでも言ってください。
皆さんの意見も含め、よりよい小説を作る努力をしていきたいと思います。

嵐の夜

王都、エストニア。昼から降り始めた雨はやがて風を纏い、嵐へと変わっていった。昼から夜へと時が経つにつれてその勢いは頂点へと達し、王都に暮らすすべての者は空を見上げ、家へと籠った。

嵐吹き荒れる夜、誰もいないはずの広場に十数人の騎士達が小さく円を作り集まっている。

全員が全員、鎧の上にマントをはおり、吹き荒れる豪雨の中で言葉を交わす。外へ出るものなど誰もいない夜、隣の者の声を聞き取るのも困難な嵐の広場は、騎士たちにとって格好の合流地点となった。何故ならば、彼らには魔法という人の理解を超えた力があるからだ。円の周りに小規模な竜巻を作り、その中で会話を始める。嵐の中にできた無風の空間で彼らの会話は始まった。

「剣は？」「はっ、ここに」

円の中から一人の騎士が懐から布を巻かれた剣を取り出し、柄の部分だけ布を外し、全員に見せる。少しの汚れもない柄を見て、一同に頷いていく。

「術式結晶は？」「こちらです」

今度は別の騎士が淡い黄色の光を放つ水晶のようなものを取り出し、また全員に見せる。

「よしっ。まずは、ここに集ってくれた者全員に礼を言いたい」

確認を終えるとその中の一人、比較的小さい人影が全員に向け頭を

下げた。
その突然の動きに目を見合わせる者、返すように頭を下げる者、彼らは様々な対応を取る。
小柄だが、頭を下げた人物はこの集団の中のリーダー格のような存在だ。そんな人物にいきなり頭を下げられ、困惑するのも無理はない。
だが、その中において一番体躯の大きな騎士が一歩踏み出し、口を開く。
「クレア殿、礼を言われるのはまだ早いです。我々はただ集ったのではありません、貴方の意に賛同しその目的を果たすために集ったのです」

低く、静かな言葉だった。それなのにその言葉の中にはクレアと呼ばれた者に対する敬意と、クレアの軽率な礼に対しての諌めの二つの意志が込められていた。皆、最初の礼の言葉は嬉しかった。それでも、そこで達成感など抱けるはずもない。それほどまで彼らはここに集ったことに、全てを掛ける信念を持っていた。
大柄の男が放った言葉に残りの者たちも自分たちも同じ意見だと言わんばかりに頷く。

全員の乱れない心、揺れることのない強固な意思、そして何よりも深く繋がれた絆。それらすべてを確認したクレアは瞳に涙が浮かびそうになるのを堪えながら、意を決したように口を開く。

「そうだったな……ブラムス殿。我らは大いなる理想の為にここに集った。故に我らが思いは一つ、我らが命は一つ。誰一人として欠けることは許さない」

言葉を紡ぎながら自らの懐へ手を入れ、小さな玉を取り出す。

「我らが願いは唯一つ。祖国エストニアの為、我らは今羽ばたく！」

天高く掲げられた小さな玉は極光を放ち全員を包む。
嵐を裂き、夜を吹き飛ばすかのような光の後には誰の姿も残ってはいなかった。

それが物語の始まり。
最初の夜――『嵐の結集』

落ちて異世界

1

十一月、冬本番となった町は日ごとに寒さを増し、その代わりに人々の着込む服が厚くなっていく日々の中にあって、少年の服装は一年通して変わらないでいた。
学校指定の黒い学ラン、ズボン。さすがにそれだけではなく今日は首に青いマフラーを巻いている。

「はぁ～」

白い息溜息を吐きながら、ゆっくりと通学路の坂道を登っていく。入学して二年経つが未だにこの坂道だけは慣れてはくれない。毎日登っているが、毎日なんでこんな場所に学校を建てたのかと、心の中で愚痴をこぼす。

黒い髪をガシガシと掻きながら坂を登りきった所で、不意に声を掛けられた。

「相変わらずめんどくさそうな顔してるねー。一条成斗（セイト）君」
「うるさいぞ来栖祐里（クルス ユウリ）君。生徒会長なんだから暇なら生徒、つまり俺の要望を叶えてくれ」

坂の頂上にある校門の前に立っていたのはこの学校の生徒会長であり成斗の数少ない友人、来栖祐里だった。日本人のそれとは少し違う、洋風の美しさを持ちながらそれを鼻にかけることのない気さくな態度で男女ともに人気があり、祐里は二年生にして生徒会長を務めている。

「ほほう。君に要望があるとは初耳だね。聞こうではないか言ってみな」

最初の貴族染みたしゃべり方から、最後のぶっきらぼうな言葉へと口元を少し歪めながら口調を変える。
祐里はなぜだか成斗と話す時だけは、きれいな言葉と雑な話し方が入り混じっていた。

「俺の要望は一つ。十時登校にしてくれよ」

先生にあてられた生徒のように、右手を高々と挙げて学校の仕組みを根底から覆すような暴論を宣言する成斗に祐里は嫌な顔一つせず、むしろ笑顔を作る。

「なんでそんな事を希望するのかな？」
「そりゃ簡単だ。十時登校なら、俺は遅刻じゃないからな」

そう言って学校の時計へと指をさす。
時刻は九時五十分。学校への登校時間としては完全かつ完璧に遅刻だが、確かに成斗の希望した時刻ならば遅刻ではない。

しかし、そんなことが受け入れられるはずもなく……

「んじゃ、職員室行こうか」

成斗は最も行きたくない場所へ引きずられていった。

2

「なんでイチイチ先生に知らせるんだよ。そのまま見逃してくれりゃいいのに……」

時刻はすでに午後五時。登校からそのまま職員室にて説教を喰らい、授業が終わった後にも職員室にて再度説教を喰らった成斗は横を歩く祐里に愚痴をこぼす。

さすがに十一月ともなれば五時でもすでに日は沈んでしまっている。

「そういうわけにはいかないよ。僕は生徒会長だし」

「本音は？」

「成斗が怒られるの見たかったから」

淀みの無い素直な笑顔を浮かべる祐里。その笑顔を苦い顔で見る成斗。

「お前やっぱ性格悪いな」

溜息交じりにそう言うと、肩に掛けたカバンをしっかりと背負いなおす。

「んじゃ、また明日」

見晴らしのいい交差点、そこが成斗の家と祐里の家の分岐点。祐里も成斗と同じようにカバンを背負いなおし帰りの挨拶を返す。

「じゃあ明日こそ、遅刻しないでよ」

「あぁ。もうお前の笑顔は見たくねぇからな」

振り向きながら片手を振り、お互いに帰路につく。黒髪の少年と茶髪の少年は同じペースで離れて行った。

3

「ただいまっと」
玄関の扉を開け、帰宅の挨拶を部屋へ向ける。だが、返答は帰ってこない。

成斗は高校生にして一人暮らしをしている。親元を離れて学校に通っているわけではなく、最初から成斗に家族と呼ぶべき存在はいなかった。
物心ついた時より孤児院にいたので、特に親がいないことに何か感情を持ったことはない。孤児院には兄弟と呼べる存在がいたし、父親のような存在もいた。だからこそ、人に言われるような悲壮感は持ったことは無い。

いつもはまず、学ランやズボンに皺がつかないようにハンガーに掛けるのだが、今日は朝からの説教三昧で少々体力的に疲弊していたのでマフラーを外してベッドへなだれ込む。

「ふぃぃーー」

気の抜けた声を漏らしながらうつ伏せで横になる。ようやく家に帰ってきたのを実感した。

「やべっ、寝ちまいそうだ」

沈みかけた意識を手放さないように、自らを引きずり上げる。このまま寝てしまってはまずいと、起き上がろうと顔をあげた瞬間、

「えっ――――」

力を込めた腕からフッと重さが消える。

理由は単純明快。成斗は落下の真っ最中だった。

「えええええっ！？　なっなんだこれ」

ベッドから転がり落ちたのならまだましだが、そんな落下とはレベルが違う。テレビで見るスカイダイビングみたいに体が宙に浮いているような感覚と無力感が体を支配する。

しかも部屋にいたはずが、落下の途中で見える光景は青い、星の川のような空間だった。

自分が落下しているため辺りに漂う光も移動しているのか判別はつかないが、成斗の周りを青い色紙に線を引くように光が駆け抜けていく。

「ちょっと待て……これはきっと夢だ、それしかない。だからきっと、あの目の前に見える黒いヤツも夢……だよな…」

成斗にどんどん迫る黒い魔法陣のような影、全てを飲み込むような黒に深紅で刻まれた紋様。

触れることすら躊躇うような陣へ叫び声とともに飲み込まれた。

4

「くぅっっ」

飲み込まれる瞬間、閉じた瞼をゆっくりと開く。

頬に当たる風、さわやかな空気。今までにあった胸を締め付けるような空気が一転、爽快感をその身に感じる。

「こっこれは……」

開いた瞼をそのまま大きく見開く。先ほどまでの星空のような空間も、ある種機械的な美しさを秘めていた。だが、今目の前に広がるのは広大な自然美。
雲ひとつない青空、日本ではなかなか見れない緑の海、澄みきった空気。人と交わらないことで生まれた大自然の美しさがそこにはあった。
「すごい……すごいけど、、、、同時にやばいーー！」
さっきまではただただ落下していたからよかったものの、今では完全に地上が見えている。さらに運の悪いことに成斗の落下地点だけ木の無い小さな空き地になっていた。
このまま行けば、あと数秒で成斗は見るも無残な姿へと変わるだろう。

「ちょっ…ちょっと待って、来るな来る地面ーーっ。俺が迫ってるのかもだけど、来るなぁぁーーー」
叫んでみても状況は変わらない。無情にも重力は加速しか許さず、あれこれ考える間もなく時は過ぎ地面に後数十メートルとした所で、
「駆ける風塵（ウィルウィンド）」
凛とした美しい声とともに突然吹いた強風が成斗を包みこんだ。
風は成斗の落下速度を相殺し、それだけではなく一瞬成斗に浮遊感すら与えた。
まぁ、落ちるということに変わりはないので結局成斗は地面に体を打ち付けることとなる。だがしかし本来なら潰れたトマトみたいになってもおかしくないところを尻餅程度で済んだのは僥倖と言って

いい。

「痛たたた」

痛む尻や腰をさすっていると、背後から不意に言葉を掛けられた。

「お怪我はございませんか？」

地面に激突する瞬間聞こえたのと同じ声に成斗は思わず振り返る。

そこには薄い紫色の髪と大きな碧い瞳をした美人の外国人が立っている。なぜか、豪奢な鎧を身につけて。

「えーっと、一応怪我は無い……、と思います」

美女の腰に掛けられた剣を横目に見ながら律儀に答える。驚くほどの美しさと物騒な出で立ちの奇妙なコラボレーションに困惑せずにはいられない。もうこれ以上のびっくりは勘弁してくれよ、と成斗が心の中で呟いたのも知らずに、その女性は安堵の笑みを浮かべると、いきなり片膝をついて頭をさげる。

突然、頭を下げられて慌てふためく成斗をよそに、下を向いたまま小さな口を開く。

「お待ちしておりました。我らが王よ」

「……えっ？」

いきなりすぎてもはや驚きの表情すら出ない。人は衝撃を受けすぎると表情が消えるらしい。

成斗は目の前の美女の言葉を何度か反芻してから。

「えええええーーーっ！！」

これまでで一番の叫び声をあげた。

浮き上がる事実

1

現在地は見知らぬ森にできた広場。
目の前に立っているのは白を基本とした豪華な鎧に身を包む美女。
そして、辺りを取り囲む屈強な騎士。

（やばい……どうしようこの状況…）

完全に退路を断たれた成斗は一応今はおとなしく座っている。
数分前までの状況だったらダッシュで逃げることも考えたが、ぞろぞろと集まってきた騎士達によってそんな考えは見知らぬ世界に羽ばたいて行ってしまった。

「とっ、とりあえず名前を教えていただいても、その、よろしかったり…しますでしょうか？」

最大限の注意を払いながら、なるべく相手を怒らせないように会話を始める。厳つい男たちに美女と二人、向かい合って座ったままというのも耐えられるものではない。

「そうですね、至らず申し訳ありません。私の名はクレア・レンベルクと申します。クレアとお呼びください、王よ」

最後に付け足された言葉に触れないように頭の中に『クレア』という名前を押し込み、成斗もひとまず名乗る。親しくしたいわけではないが、名前だけ聞いて言わない訳にもいかない。

「よろしくクレアさん。俺は一条成斗。俺も成斗でいいよ」
「セイト様ですか。王に相応しい凛々しいお名前をしていらっしゃる」

クレアはそう言って、うんうんと頷き、なぜだか周りの騎士達も同じく頷く。ゴツい男達の、しかも集団での笑顔などあまり見たいものではなかった。
眼前に広がる異様な光景から成斗はそっと視線を外す。

「少し質問していいですか？　とりあえず、ここか何処だか知りたいんですけど」
「現在地ですか、ここはエストニア王国の南端、カチテア領とノイ領の間に位置するテテオの森と言います」

質問した途端、クレアの口から一気に見知らぬ名前の連続掃射が開始される。その弾丸はクレアの知らないうちに成斗の僅かな希望を撃ち抜いていた。

（だよな～、やっぱ日本じゃないよな～。日本に王国なんて無いし、さすがにこの人達総出でドッキリやってるわけもないし。なんとか飛行機探して日本に帰らねば）

「それと、セイト様の居られた世界ではありません」
「心読んだの！？　後、何その時間差ハートブレイク！　作戦だとしたら大成功、俺の心は粉々ですよ」

塞き止められた濁流が一気に氾濫するかのように飛び出す成斗の言葉にクレアは少したじろぐ。
それとは対照的に成斗の勢いは止まらない。

「よーし、この際もう触れてやる！　無視して終わらせたかったけどしょうがない、なんで俺が王様なんて呼ばれてるんだ！？　俺は唯の高校生だぜ？」
そう言い放った瞬間、クレアの瞳がこれまでと違う鋭さを映し出した。
「いえ、それは違います」
静かな、それでいて重たい声だった。その一声で成斗の勢いは制されてしまう。

「貴方様が唯の人などと世迷言を。貴方は光の龍印をその身に宿す、エストニア王国の正統王位継承者なのです」

ゆったりとした一言はまるで剣のような言葉だった。振りぬかれたその剣は動揺と困惑に包みこまれた成斗の心に確かな一撃を与えた。もはやこれまでのような驚きの声など出ない。静かにクレアの言葉へ耳を傾ける。

「戸惑うのも無理はないでしょう。少しだけ、お話を聞いていただけますか？」

少しだけ声を和らげ、クレアは話を始める

2

「まず、先ほど申したようにここは貴方様がいた世界とは違います。ノルディーシャ、それがこの世界の名前です」

最初の一言から成斗にとっては重要な事だったが、そこで口を出すようなことは敢えてしない。真剣な顔つきでクレアの言葉に集中する。

成斗の素早い対応に心中で感嘆し、クレアは少し微笑んで話を続ける。

「この世界には四つの国があります。大陸の南に位置する我らが祖国、エストニア。西側に独立自営都市デンダルが、東には交易国コロン。そして、南に帝国ヴォルクスがあります」

話しながらクレアは一人の騎士から茶色い巻物を受け取り、成斗と自分の間に広げた。

一見して世界地図のような物だと成斗は思う。ただ成斗の知る世界地図と明らかに違うところがある、それは海面の少なさだ。

クレアの広げた地図は大部分をひし形に似た陸地が占めていて、周りをグルリと囲むようにほんの少しだけ海が描かれていた。

成斗は口を開こうとして、やめた。幾つか疑問はあったが、今はこの世界について知らないことが多すぎる。

「ここがエストニアです」さっき言ったように南側の部分を指差す。

「エストニアは四国の中でも最大の領地を保有しています」

確かに、クレアが指差した『エストニア』と書かれた範囲は地図の三分の一程を占めていた。地図からの情報しかないので、大きさはわからないが他の三国と比べると領土の面では大きく上回っていた。

「エストニアは第二級神、光を齎す者ヒュミエルが遥か昔に創ったと言われております。それ故、最古の歴史を誇る国なのです」

神が国を創るという聞きなれない言葉をクレアは当然のように口にする。そこが成斗の知る世界と今居る世界との大きな差異だった。

ノルディーシャにおいて、『神』という存在は確かに存在していて、

人と明確な一線を画している。

「突然ですが、一つ聞いてもよろしいでしょうか？」
説明口調だったものが、一転疑問の形に変化する。
「ええ、いいですよ」
ここまで色々と教えて貰った上、否定する理由も別に無いので成斗はすぐに快諾する。
「貴方様に御両親は居られますか？」
クレアの質問に、成斗はつい言い淀んでしまった。答えは決まっているのだが、それを答えるのが少しだけ怖かった。
このタイミングでの質問に嫌な予感しかしてこない。
「……いない」
ゆっくりと噛み締めるように成斗は答える。その答えにクレアはやはりといった風に小さく頷いた。
それはクレアにとって予想通りの答えだったから。

「居なくて当然なのです。貴方の父上こそ、前エストニア王国二百三十一代国王、フォルレイ・アルティケル様です」

草原に一陣の風が吹き抜ける。まるで成斗の心のざわつきを代弁するような風だった。成斗ですら知らない父親についての話が、突然訪れた世界で語られる事になるなんて予想すらできなかった。
風に乱された淡い紫の髪を掻き上げながらクレアは言葉を続けた。

「だからこそ、貴方はエストニア王国の正統王位継承者なのです」

これまでのクレアの言葉が成斗の頭の中で繋がっていく。自分がここに呼ばれた理由、大勢の騎士達が取り囲んでいる理由、そしてなによりクレアが成斗を『王』と呼んだ理由が。
成斗は周りの騎士達の自らに向けられた視線の意味が、敬意だとい

うことにようやく気付く。

「じゃあ、俺がここにいるのは……」

頭の中で導かれた回答を確実なものに変えるべく、成斗は問いかける。

「えぇ、私達がこの世界に貴方様をお呼びしたのです。このエストピアの王に成って頂くために」

突然知らない世界に連れてこられ、突然に成斗は王位を任された。出会ってから呼ばれ続けた『王』というのは人違いか何かだと思っていた。だが違う、クレアは成斗を王に据えるべくこの世界、ノルディーシャに呼んだのだ。それはもはや逃れようの無い事実でしかない。

「ホントに、俺が王様なのか？　これから王宮とか行って、大勢の前で偉そうな事言ったりするのか？」

少しだけ王様になった自分を想像してみる。

やたらと豪華な服を着て、引きずるくらいのマントを羽織り頭を下げる大勢の人達に対してにこやかに手を振る自分。周りにはクレアを筆頭に沢山の人間が取り巻いている。

（似合わねぇ～）

なんだか安いコメディーみたいだった。

あれこれと想像する成斗に、なぜだか少し申し訳なさそうな顔をクレアは浮かべる。

だが、そんな何か言いたげなクレアの表情を成斗が見ることは無かった。何故ならば、クレアの表情は一瞬にして武人のものへと変わ

っていたから。
成斗を取り巻く空気が一気に凍りついた。
戦闘経験など皆無の成斗にもわかるくらい冷たい空気だった。
「どうしたんですか？　何か――――」
「動かないでっ！！」
事態を聞こうと立ちあがろうとした所で突然クレアに怒鳴られる成斗。見れば、いつの間にか座っていた成斗とクレアを隠すように騎士達が二人を囲っていた。
「敵は？」
「おそらくこちらと同数ほどかと。防御術式を展開しますか？」
「いや、そのまま待機だ」
クレアと騎士の会話は最低限の言葉で交わされていく。未だ事態の飲み込めない成斗は何もせず、右側に立つ騎士の背中を見ていた。
大きな背中だった。だからだろうか、一瞬で背中にできた空洞もやたらと大きく見えた。
「がぁあああっ！」
声と共に成斗の目の前に人の頭ほどの穴が穿たれた。
攻撃はまさに一瞬。胸に大きな穴を作った騎士は激痛に対する呻きをあげ、すぐに絶命する。咄嗟にクレアが成斗の目を手で覆ったため、成斗には絶叫だけが聞こえた。
「遠距離射撃だ、総員散開しろ！　トレスとピピケで狙撃手を攻撃！」
クレアの指令が伝え終わるのとほぼ同時に、十人程いた騎士たちは

すぐさま行動に移った。
その場はすでに戦場だった。

繋がれる願い

1

クレアに手を引かれながら森の中を走る。
成斗は足に自信があったわけではないが、それでも少し悲しくなるぐらいクレアの移動速度は速い。手を握られているため距離が開くことは無いが、成斗の全速力でやっと付いて行けるほどの速さだった。

「くっクレアさん、どこまっ、でいくん、ですか？」

すでに息の上がっている成斗は途切れ途切れで話す。
それほど疲弊した成斗に対し、クレアは涼しい顔で返答する。

「そうですね、この辺りで迎撃します。ここならば狙撃される事もないでしょう」

ようやく、クレア達の足が止まる。酸素を求め絶叫する肺のために貪るように息をする成斗だが、他の人達は息一つ乱していなかった。もといた世界ならば一流アスリートだと言われても何の違和感もない屈強な騎士達ならば当然だと思えるが、同い年くらいのクレアも平然としている様子を見ると、やはり少しだけ苦い気持ちになる。

「それで、なんで俺達は狙われてるんだ？」

ようやく息が整ってきたところで、成斗が口を開く。

「いえ、私たちではなく、貴方様が狙われているのでしょう」
周囲への警戒を行いながら、クレアは成斗の問いに答える。
言われてみれば、クレア達は成斗を取り囲むように待機している。
だが、当然ながら成斗には疑問が生じる。
「なんで俺が狙われるんです？　俺は、その、一応王様なんじゃ…？」
数分前に聞かされた衝撃の発言。その時確かにクレアは成斗が王だと言っていた。だからこそ、成斗には今襲われている状況が理解できない。王になってから暗殺されるというのは一応歴史の話では多い。
しかし、わざわざ王するために異世界から呼び出されてすぐに殺されそうにさるいわれなど無かった。
「まさか、他の国からの刺客とか？」
「いいえ、今回の襲撃は間違いなくエストニア王国からのものでしょう」
クレアの発言にますます成斗は困惑する。
他国からでもなく、自分の国から。さらにクレアｈ『間違いなく』と言った。なぜそれほどまでに確信できるのだろうか？
疑問が疑問を呼び寄せる連鎖の中、成斗の思考は突如中断させられる。
吹き飛ぶ紫の髪だけが見えた。
「えっ……」

あまりの事に情けない声が成斗の口から洩れた。生温かい液体が自分の手にベットリと付着している事に気づく。
それは自分を庇うように倒れたクレアの血だった。

「ブラムス。敵が、来る、ぞ」

右肩を抑えながら、クレアは熊のように大きな騎士に指示を送る。
振り返らず、ブラムスは首だけを動かし返答した。

「クレアさん！　大丈夫な――」

クレアに駆け寄った成斗だったが、そこから先の言葉が出ない。
クレアの白い甲冑は真っ赤に染まっていた。赤い液体はそれでもなお、右肩から流れ続ける。
右肩はひどい有様だった。最初に襲撃された時に成斗が見た穴よりは小さいが、それでも今にも右腕が取れそうなほどに空洞が穿たれている。
最初の襲撃時はクレアのおかげで凄惨な死体を見る事がなかったが、今回はしっかりと傷口を見てしまった。
赤い肉からとめどない血液が漏れ出てくる。ドラマなどとは違う本物の血の瀑布。一気に嘔吐感がせり上がってくる。
口を押さえ、何とか吐くのを我慢していると、
「防がれましたか。ですがまぁ、クレア殿に傷を付けた事で良しとしましょう」

場違いなくらいゆったりとした声が、木々の間を縫って成斗達に聞こえてきた。
森の中から一人の男が歩いてくる。茶色い髪に小さな眼鏡をかけた好青年といった風貌で、左手には緑色の弓を携え、クレア達と似た鎧を着ている。

いや、少しだけ違う。クレア達の鎧は白を基本とした物だったが、現れた男が着ているのは黒を基本としていた。

「貴様っ！　モルネア……モルネア・ハーネヒュルト。王直属の暗殺部隊の主力である貴様が来るとは……」

クレアの指示を受けたブラムスは、驚きながらも正面でモルネアという茶髪の男を捉えた。

それだけで人を殺せるのではないかという鋭いブラムスの視線をモルネアは涼しい顔で受け止める。

「当然でしょう。貴方がたは重罪人です。私が来るのが道理というもの。ですが、少し違います、六王剣を相手に私一人では来ませんよ」

振り上げた右手を合図に、辺りからモルネアと同じ鎧を着た男達が現れる。

いつの間にか、成斗達は取り囲まれていた。

クレアが連れてきた騎士達はそれぞれ周りの敵と対峙する。数に大差はない。

まさに一触即発の状況の中でもモルネアのゆったりとした口調は変わらなかった。

「さすがは六王剣の一角、クレア・レンベルク殿に選ばれた騎士達だ。全員なかなかの力量を持ってらっしゃる。ですが、肝心のクレア殿がそれでは貴方達に勝機はあるますまい」

モルネアの視線が右肩を抑えるクレアに向けられた。右腕はおそらく使えないだろう。それでも成斗を庇うようにしながら、クレアは強い視線をモルネアに向けていた。

「まさか、貴方ほどの射手が来るとは思っていませんでした。この右手はその代償でしょう。それでも私はエストニア王国における至高の一振り。左手だけでも貴方の頭と胴体を分けることはできますよ」

痛みを堪えながら、それでもクレアは余裕の笑みを浮かべる。傷口から左手を離し、腰の剣に手を添えた。

突撃しようと身を屈めるクレアと、弓を構えたモルネアの間にブラムスが割って入る。

「ここは、私達にお任せください。貴方はセイト様と逃げるべきです」

やはり、この時もブラムスはクレアには振り向かない。瞳はモルネアに向けたままだった。

「ダメです。全員で戦えばいいではないですか！」

「それではセイト様にも危害が及びます」

感情を表にだすクレアとは対照的にブラムスは静かに語る。

ブラムスの言った事は事実だった。それが分かっていたからこそ、クレアは何も言い返せない。

彼らは普通の部下ではない。まだまだ幼いクレアに付き従い、戦陣を共に駆け抜けた大事な存在だった。

「セイト様」

クレアと話す時ですら振り向かなかったブラムスが、後ろで呆然としている成斗を呼び掛けた。

頬に走る傷、鋭い目つき、ブラムスは研ぎ澄まされた刃のような男だった。厳のような姿に、成斗は怯んでしまう。ブラムス自身、そういった反応には慣れているのだろう、少しだけ顔を緩める。

「時間があまりなく、言葉を交わすことはありませんでしたが一つだけ、いずれ王に成られる貴方様へお願いしたい事があります」

自分より遥かに生きた男から放たれる敬意の言葉に成斗は申し訳ない気がしてしまう。それに何よりブラムスは成斗が王に成る事に対して一切の疑問を持っていない。まだまだ未熟としか言えない小僧に自分の上を易々と与えると言う。

「私は祖国を愛しております。私が願うのは唯一つ、エストニアに光を齎してくださいませ」

「えっ……いや、俺はそんな」

自分の願いを成斗に託す。さらには頭すら下げていた。

成斗は答える事も出来ない。ただ、言葉に詰まるだけだった。

「俺も、お願いします！　生まれのテドラトって村を無くさないでください」

ブラムスの言葉に続くように一人の騎士から声が上がる。

「俺は弟がいるんです。できればいい仕事に……」

「それはちょっと違うだろうが。自分は母を残しています、王に会えれば喜ぶと思うので時間があれば話でもしてやってください」

「僕の村には医者が少ないので配備していただければ嬉しいのですが」

「俺の嫁に旦那は素晴らしい奴だと伝えてください」

「お前結婚してないだろうが」

武器を構えた騎士達がまるで夢を語る子供のように笑い、そして希望を話していく。周りは敵で囲まれているというのに楽しそうに語る。
そのすべてが成斗に投げかけられる。戸惑うだけで、誰の言葉にも返答できない非力な少年に皆が自分の夢を託していく。

「俺は、そんなの……」

心を締め付けられているようだった。託される願いが全て美しく、背負うには重い。さらにその願いのどれにも彼らは入っていなかった。まるで自分には出来ないから後は頼むと、そう言われてるような気さえした。

「クレア殿、王を頼みます」

ブラムスは再び険しい表情に戻る。戦いを前にした武人の顔だった。同じように周りの騎士達も顔から笑顔をはぎ取る。成斗に布に包まれた杖のような物を手渡すと再び臨戦態勢に戻っていった。
クレアは無言で成斗の手をとる。血にで汚れた手で成斗の手を掴むのは少し憚られたが、意を決したように左の腕で成斗の身を寄せると、ひっぱりながら駆けだす。

成斗はその時も、ずっとブラムス達を見ていた。言葉は返せない。自分が彼らの言葉に、何かを返せると思えなかった。強く強く自分の矮小さを呪う。自分が叶えると誓う事も出来ず、王に成れないと否定する事も出来ない。ただただ戦いに挑む男達を見る事しかできなかった。

走り出してしばらくすると、後方から男達の叫ぶ声が聞こえてくる。気合いの掛け声に苦痛の声が入り混じる。成斗は苦痛の声が敵のものだと願うばかりだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5200m/

―光を継ぐ者―

2010年10月20日06時40分発行